

年間第6主日

世界病者の日

福音朗読 マルコ 1・40-45

2024.2.11 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

今日の福音では、重い皮膚病を患っている人がイエス様の前にやって来て、そして癒されていく、そういう場面が朗読されましたけども、この重い皮膚病というのは何か病名が付いた体の病気というよりも、旧約聖書の中では神様から送られて来る、回心へのきっかけとなる、そういう出来事全体を表わしていると見ることができます。

旧約聖書の中でこの病を送られたのは、代表的なのはモーセの姉であるミリアムという人と、それから、シリアの大將軍ナアマンという二人がいます。

ミリアムは、突然「モーセだけが神様のことばを預る、そういう恵みにあるのはおかしい」と言い出して、「神様はわたしをも通して語るはずなんだ」って言ってモーセを批判し始める。そうすると、神様から重い皮膚病を送られて、そしてその思い間違いを悔い改める、そのように促されるわけです（民数記 12・2-16）。

一方、ナアマンは戦に勝って、そして王様の二番目の地位という、ある意味で非常に傲慢な人物であった。しかし、この病のために、なんとかこの病から治りたいという希望によって、自分より目下の者たちの助言に耳を傾けるようになっていく。そして自分を丁重に扱わない預言者エリシャの言うことを聞くようになる。つまりは、自分は人々から大切にされて、そして自分が命令する、周りの人が聞くっていうような思いの中にいた人が、周りの人の言うことに耳を傾け、そして従っていく。生まれ変わりました。そういうお話しがあるわけです（列王記下 5・1-14）。

そういうことで、重い皮膚病っていうのは、人がそれまでのある意味で思い上がりっていうか思い違いから、悔い改めて神様のもとに導かれていくための一つの経験全体を象徴的に表わす、そういうことというふうに理解することができます。ですから必ずしも体の病気とは限らない。もちろん、体の病気を得て今までの自分の人生を振り返ったり、いろいろ考え方を換えられたりという経験をする人もいます。でもそれだけではなくて、今までのやり方が通用しないとか、簡単な例では、学生の頃とそして今度仕事になってみたら全然違う、もう一回一から教えてもらって学び直さなければいけないってことで、自分自身のそういう傲慢さというか高ぶった

考え方が打ち砕かれるような経験とかも全部含めて、この重い皮膚病の経験の中に見て取ることができるわけなんです。

ところで、今日は、冒頭にも申し上げましたけども、「世界病者の日」ということになっています。この場合の「世界病者の日」の病者は、いわゆる狭い意味での心身の病気のことです。病気を得ている人々、そしてそういう人々と共にあるはずの教会あるいは人類全体の今の状態はどうかを、神様の御前で、イエス様の視点で振り返ってみる、そういう日です。

毎年「世界病者の日」にあたって教皇様はメッセージをお出しになっているんですけども、わたしたちが病気ってことを通して個人が何か振り返るといよりも、わたしたちの中に病気の方がいらっしゃる、あるいは神様がそのような状態を残していらっしゃることの中に、全体として——教会全体、人類全体として——考え方を改めて、振り返らなければならない、そういうきっかけを見出す、それこそが信仰のものの見方なんだ、と。罰とかそういうことではなくてです。

教皇様がこの今年の[メッセージ](#)の中でおっしゃっているのは——これは「世界病者の日」のずうっと毎年共通のテーマでもありますけども——病気の人を孤独の中に、一人でその重荷を担わなければならないような者として放っておいてはならない、ということです。教皇様は、病の人あるいは困難にある人を孤独に置いておく、その現代の文化——よくおっしゃいます——三つの文化、個人主義の文化、それから無関心の文化、そして使い捨てる文化、そういうことからわたしたちは方向性を改めなければならないということを訴えていらっしゃいます。ちょっと朗読いたします。

「平和を享受し、資源に恵まれている国であっても、老いたり病になると、往々にして孤独を味わうことになり、見捨てられることすらあると強調しておかなければなりません。この悲しい現実は、何より個人主義の文化がもたらした結果です。いかなる犠牲を払っても成果を上げることを称揚し、効率主義神話を助長し、スピードについていけなくなった人は無視し、冷酷に扱うことさえいとわない文化です。そうしてそれは使い捨て文化に化します。そこでは人間をもはや、尊重され守られるべき最重要の価値としてみなさないということです」。

そして、「もはや役に立たない」とか「まだ役に立たない」、そういう人は見捨てていく、そういうような文化が蔓延していると教皇様はおっしゃるわけですが、でも、わたしたちが生まれてきたのは、この命を誰かが受け止めてくれたからなんだってことを思い起こしながら、使い捨てとか個人主義ではなくて重荷を互いに担い合う、そういういたわりの文化を育んでいかなきゃいけない、とおっしゃるわけです。

「キリスト者こそ、イエスのいつくしみ深いまなざしを自分のものとするよう求められています」。イエスのいつくしみ深いまなざしってというのは、すべての人の罪と痛みをご自分のものとして担われる、そういうかたのまなざしです。

今日、2月11日が「世界病者の日」とされているのは、ルルドの聖母の記念日にあたっているからなんです。

ルルド——マリア様の聖地ですけども——そこには世界中から病気の方々が集まって、でも神様のもとで、マリア様の取り次ぎのもとで、一つの共同体になっていく、繋げられていく、病気を通して人々が繋がっていく、そういう聖地です、ルルドがね。たとえ第一の関心が、自分が治りたい、親しい人が治ったら良いという思いだとしても、そこに集まってみたら同じようにいろいろな病を負っている人々が、またそれをケアする、心配する人々が集まっているということで、共に一つの一致した共同体として祈りが捧げられる場になる。

わたしたちが、ルルドのように特別な場所に集まらなくても、いつも教会が、そしてこの社会が、互いの重荷を担い合う、病によって分断されるのではなくて、むしろ繋げられていく、そういう者であるように特に今日呼びかけられている教会の使命を果たしていく、その思いを新たにしたいと思います。そして、特にまたこの教会において、色々な形で困難でミサに集まることのできない人々の分まで、わたしたちはいつも祈っているんだっていう思いを新たにしつつ、訪問するとか繋がりを保つとかの方法で、どんな人も孤独の中に取り残すことがないように、わたしたちはいつも気付きの恵みを願いながら、イエスの心を頂きたいと思います。

世界病者の日にあたって、いろいろな形で心身の困難のある人々とのイエス様における繋がりのうちに、それぞれが必要な恵みを願い合いながら、このごミサをお捧げしましょう。

参照：2024年「第32回世界病者の日」教皇メッセージ（2024.2.11）

<https://www.cbcj.catholic.jp/2024/01/26/29024/>

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>